

第 17 回マウンテンビュー高校訪問 研修報告書



2026 年 3 月 26 日～4 月 5 日

静岡県立磐田南高等学校

2026 マウンテンビュー高校訪問研修

1. 目 的

両高校相互の交流を通して、親善関係を一層緊密にし、日米両国の友好と教育・文化の発展に寄与する。

2. 日 時

令和8年3月26日（木）～4月5日（日）

3. 派遣生徒及び職員

引 率 者

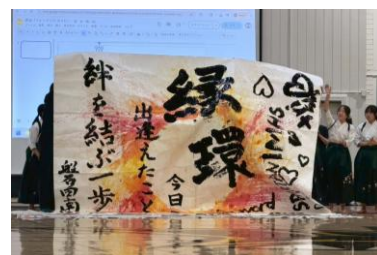
寺 田 義 彦
松 浦 義 和
山 田 愛 理
本 間 宣 資
丹 羽 英 子

生 徒

加 藤 杏 菜
窪 野 友 香
渡 邊 七 望
中 嶋 結 菜
山 本 優 羽
橘 遙 乃
三 浦 優 大
瀧 蒼
後 藤 佳 希
平 賀 美 彩 樹
三 浦 心 愛
和 田 理 均
鈴 木 良 來
本 間 大 智
相 田 葉 奈
鈴 木 ゆ わ
内 藤 授 喜
兼 子 拓 弥
片 山 知 穂
関 戸 咲 月
後 藤 杏
大 野 隼 太 朗
小 林 亜 矢 香
西 澤 結 菜
平 野 朱 梨

2026 年 3 月 第 17 回マウンテンビュー高校訪問研修日程

	滞 在 地	時刻	日程	宿 泊 先
3月 26 日 (木)	マ ウ ン テ ン ビ ュ ー	10:00	学校集合 貸切バスで中部国際空港へ	移 動
		14:10	NH494 便で中部国際空港から成田空港へ	
		15:25	成田空港 着	
		17:00	NH008 便で成田空港からサンフランシスコへ	
		— —	— — — — — — — — — — — — — — — —	
		10:15	サンフランシスコ空港到着 入国手続き 専用車にてサンフランシスコ市内研修 昼食	
		15:30	マウンテンビュー高校到着 歓迎会	
3月 27 日 (金)		終日	スクールアセンブリー : 体育館で数百人の MV 高校生に日本の高校生の生活や 日本文化など英語で紹介する。	ホ ー ム ス テ イ
3月 28 日 (土)		終日	MV 高校立案の活動に参加 (サンノゼ日系アメリカ人博物館、エクスポラトリウム 等)	
3月 29 日 (日)		終日	ホストファミリーデー	
3月 30 日 (月)		終日	ミニアセンブリー :いくつかの教室で 20 人程度の MV 高校生に日本文化を英語で紹介する。	
3月 31 日 (火)		終日	サンフランシスコ市内研修 (ゴールデンゲートブリッジ、ギラデリスカエア、チェイスセンター 等を予定)	
4月 1 日 (水)		終日	MV 高校立案の活動に参加	
4月 2 日 (木)	ロ サ ン ゼ ル ス	7:30	朝食会后、専用車で空港へ出発	ホ テ ル
		10:23	ユナイテッド航空 1498 便(米国内線)でロサンゼルス空港へ	
		12:00	ロサンゼルス空港到着	移 動
		13:00	専用車で移動 ロサンゼルス研修 (サンタモニカ、グリフィス天文台 等を予定)	
		18:30	夕食 ロサンゼルス泊 (New Gardena HOTEL)	
4月 3 日 (金)		9:00	朝食 チェックアウト ロサンゼルス研修 (UCLA キャンパスツアー&学生との交流 等を予定、 ユニバーサルスタジオ)	移 動
		21:00	自由昼食・夕食 専用車にてロサンゼルス空港着	
4月 4 日 (土)		0:50	NH105 便 出国手続きの後、羽田空港へ	機 中 泊
4月 5 日 (日)		5:05	羽田空港 着 入国手続き	
		11:00	貸し切りバスで磐田へ 磐田南高校 到着	



マウンテンビュー高校訪問ふりかえり

第 16 回マウンテンビュー高校訪問団団長 寺田義彦

磐田南高校とカリフォルニア州マウンテンビュー高校は姉妹校として 30 年以上交流を続けています。双方の学校が中心となって企画を行っているこの研修は、お互いの学校を訪問しての文化紹介活動・授業参加・同世代生徒宅でのホームステイなど多彩な活動が含まれます。このため異文化を直接体験できると同時に自国の文化の良さも再認識できる素晴らしい研修となっています。

今回 2026 年春は磐田南高校の生徒 25 名が訪米し 11 日間の貴重な体験を積むことができました。特に、ホストファミリーや現地の学校で案内役をしてくれたアメリカ人高校生（バディ）との絆はこの後も長く続いていくことになりそうです。

訪問先のマウンテンビュー高校はカリフォルニア州のシリコンバレーにあり、近くにはグーグルやアップルの本社などがあるため語学研修のみならず最先端企業の雰囲気も体感できました。スタンフォードや UCLA などの有名大学も見学することができ自分たちの将来の進路選択の参考にもなりました。

参加者・引率とも研修期間中は大きく体調を崩すことなく、この交流の主旨「両校の生徒、教職員ならびに保護者等の交流を通して、豊かな国際感覚と広い視野をもった人材の育成を図る。」が十分達成できました。

この研修でお世話になったマウンテンビュー高校関係者、こちらで準備・企画などの準備・サポートにかかわっていただいた方々にも深く感謝しております。

2026 年 4 月

MV 訪問を終えて思うこと

教諭 松浦義和

アメリカ西海岸は、私が学生時代ずっと憧れていた場所であり、今回引率として同行する機会を得たことはとても幸運なことだと思っていました。80 年代当時様々なメディアでアメリカ西海岸の文化が紹介され、若者の注目を集めていました。特にサンタモニカやサンタクルーズ（私も MV 高校の先生のお宅に 2 泊ステイさせていただきました）などの海沿いの町は青い空、砂浜、色彩豊かな家々のコントラストが美しく、昔大いに感動した美しい風景が私の脳裏によみがえってきました。画像や映像ではなく実際に自分の目で見られたことを大変ありがたく思います。

もう一つ実際に確認できたことは、MV 高校以外でもアメリカの高校は全てそうだと思うのですが、「教室は教員が所有し管理する」ということです。生徒の HR 教室なるものは存在しないということです。ですから、生徒は常に授業を受けるために移動をしなければなりません。毎時間移動教室ということになります。あくまでも教科学習の意味合いが強く、積極性・自主性といったものは自ら育てていかなければならないところに、西洋個人主義の一面を見たように思います。本校の生徒もそういったところを感じ取ってくればありがたいなと感じます。

昨年の MV 高校の来日の際、多くの生徒・先生と体育の授業を通して交流をすることができてもこの研修の重要性を感じることができました。今回参加するにあたって生徒の学びはもちろんですが、教員間の交流や学校同士の連携を深めていくことを意識して取り組みました。日米教員での BBQ、ホームステイ、サーフィンなどのアクティビティ等とても充実したものでした。MV の先生のホスピタリティの強さを感じ、日本人の遠慮がちな姿勢は失礼にあたると考え、積極的に飛び込むこともできました。

この研修を通し強く感じたことをいくつか記します。

多様性のとらえ方の違い、MV 高校でも多くの人種の生徒が在籍していました。違うのが当たり前であり、違いについて、とやかく言わない。英語がしっかり話せなくても積極的に行けば受け入れてくれる。弱いから助けようではなく「弱いなら強くなりなよ」基準に達するようにうながす。ハンディがあるならあるなりに努力する。「厳しさ」現実主義と「努力する人ならどんな人でも受け入れる」度量の深さを感じました。日本人が持つ、多様性を大切にする意味合いの違いに気づかされました。

教育にお金を掛けることの大事さ、MV 高校と共にスタンフォード大学・UCLA も見学しました。施設、研究費が莫大で規模の違いに驚かされました。国、地方自治体が教育にお金を掛けることは重要なことだ。「福祉の充実も大切だが、それよりも教育だ」と話してくれました。

教員の採用過程も厳しく、希望者の面接・模擬授業の評価を校長自ら行い、採用しても評価が悪ければ解雇となることもある。しかし、給与水準は日本を大きく上回る。先生方は早くから出勤し教材研究をし、努力していました。いい人材を集め、いい人材を育てようとする強い気持ちが伝わり国力の違いを見せつけられたようでした。

スタンフォード大学で働く日本人研究員の方とも知り合いになることができました。「日本を離れて研究しているが、日本の医療に貢献したいから敢えて世界に出た。」と熱い気持ちや行動力を目の当たりにして気持ちが熱くなりました。

今回の研修を通じて生徒たちに受験が第一ではなく、大学のその先に何を見出し、進路を進めていくかを伝えることの大切さを確認できました。

この素晴らしい研修を継続するために尽力されている同窓会の皆様や保護者に感謝したいと思います。私自身今後もこの研修に携わり、貢献していきたいと強く考えました。

アメリカの教育から感じたこと

磐田南高校とマウンテンビュー高校の姉妹校交流を担当させていただいてから、今回で2回目のマウンテンビュー高校への訪問となりました。高校時代からバイエリア（サンフランシスコ周辺）に縁があり今回で12回目の訪米でしたが、今回が1番学びの深いものであったと感じていま

す。その理由は主に、様々な人との出会い、交流の中にあり、今回は特に印象的だった2人の方との出会いを記します。

①マウンテンビュー高校に通う男子生徒

彼はインドがルーツで、インドに住んでいたときは、大学で経営学を学びたいと考えていたそうです。しかし、アメリカに移ってからの自由な教育方針のもと、本当に自分が興味のある演劇に目覚めたという話をしてくれました。マウンテンビュー高校では、大学進学のために受けなくてはならない数学や理科、英語といった必修科目はもちろんあるものの、それ以外は自由に科目を選択することができ、特に **Tutorial** という時間は、どんな授業を受けてもいい（音楽制作、映像制作、グラフィックデザインなど）、疲れていれば休憩してもいい、図書館で自習をしてもいいという時間があるそうです。そういった時間に、高校生のうちから本当に自分の興味を駆り立てるような授業を受けるための環境と施設が整っているという話を聞くことができました。彼は、「もしアメリカに引っ越してくる機会がなければ、自分は経営学を専攻していただろう。しかしアメリカに引っ越してきたことで、自分が本当に興味のあることを見つけることができた。」と話してくれました。将来の夢を見つけるために大学に行くという考え方もありますが、日々の学びの中から興味関心を引き出し、勉強する意義に気付かせる。これこそが教育の本質であり、教育のあるべき姿であると改めて痛感しました。自分自身もそんな視点を常日頃忘れずに、日々の授業に臨みたいと思います。

②Stanford で医学を研究する静岡県出身の女性研究者

サンノゼ日系アメリカ人博物館でボランティアをされていた女性。その方は、静岡県の公立高校を卒業され、放射線技師として就職をしたのち、名門 **Stanford** 大学で医学を研究されている方でした。彼女のルーツを辿ると、放射線技師として働かれていた頃に参加したサマースクールがきっかけで **Stanford** 大学の教授との出会いがあり、そこから日本の大学院での博士号取得、**Stanford** での現在の研究職につながったとの話をしてくださいました。自分の人生を決めるものは、自身の努力、運、実力だけではなく、人との出会い、コミュニケーションが自分の可能性をさらに切り開いていくという経験を実際にされた方から直接お話を聞いたことは大変貴重でした。

今回出会った多くの方々、上記に述べた方々を含め、マウンテンビュー高校の校長先生、教員、生徒、保護者、マウンテンビュー地区教育委員会の皆様、現地添乗員等との出会いの中から学ばせてもらったこと。それはやはり、良い意味での「効率性」であったと感じます。自分の人生をどれだけ自分らしく生きるかを大事にし、そのためにどう時間を使うか、どう他者と関わるか、どれだけポジティブでいられるか、そしてそれらがいかに人生を豊かにしてくれるか、その重要性に改めて気づかせてくれました。

どちらかを批判し善悪を決めるのではなく、それぞれの良さとして受け入れ、取り入れ、**Open-minded** な心を持ち続ける姿勢が、人や国を強くしてくれる。そんな人生の本質そのものを考えさせられるような11日間でした。

今回、私はアメリカと日本の価値観の違い、そして様々な人種、環境の人々がどのようにして一つの社会に共存しているのかというところを考えながら、研修を行いました。まず、マウンテンビュー高校にいくと、様々な人種、服装の人がおり、日本とはまるで違う世界だなと思います。マウンテンビュー高校では、スペイン語、フランス語、中国語、日本語の中からどれか1クラスを選び履修しますが、カリフォルニア州にあるので、大半がスペイン語を取っているようです。もちろん親が日本人だったり中国人だったりする人は、その国の言語をとっている人が多いようでした。（日本語クラスでは、藤井風の曲が十八番らしく、歌も日本語もとても上手でした）また英文学の授業に参加したとき、毎回授業のはじめに先生がいくつか質問を投げかけ、みんなで円になって自分の考えを伝えるという時間がありました。例をいくつか挙げると、「あなたは生活のどのような場面で社会格差を感じるか」「もしあなたが将来有名になるとしたら、どのようなことで有名になりたいか」など日本よりも生徒がしっかりと社会の一員であると自覚しているような質問が多く出されていたように思います。またこの授業では「A Streetcar Named Desire（欲望という名の列車）」という作品を扱っていました。ざっくり紹介すると、人間の本能的な欲望と理性、旧南部と近代化との衝突をテーマに、誰もが欲望のままに生きた結果、破滅にたどり着く様子を描いた作品で、日本のように「ここが人物の心情を表している」「このキーワードが読み取りの上で大切」といった内容は一切なく、「各自登場人物の役になりきって討論してみよう」「この表紙絵は何を表現しているのか考えよう」といった、作品のメッセージを理解し、深く考える内容の授業を行っていました。この作品の中では、同性愛、少年愛、レイプといった内容が物語の核を担っており、現代社会と紐づけて考える機会が多く、このようにしてアメリカの一人ひとりの価値観が作られていくんだなと驚きの多い授業でした。（もちろん全部英語で授業するので、理解できずポカーンとしていた時も多々ありました）

ホームステイでは、ペスカタリアンの家庭にお邪魔しました。ペスカタリアンとは肉は食べないが、魚や卵は食べる食事スタイルを取る人々のことです。一括りに言ってしまうとベジタリアンですが、アメリカでは細分化されており、人によって、理由、何を食べるか、どのくらいなら食べるのかなどが異なります。Julia（ホストの生徒）の家では、お母さんと Julia は一切食肉を食べないが、お父さんは若干緩く、普段は肉を食べないが、全く食べないというわけではないとのことでした。日本でベジタリアンというと、動物の命を尊重するという考えがメジャーですが、アメリカでは経済的な理由（食肉の生産には多額のコストがかかる）や、健康を考えてこのような食事スタイルを取る人もいます。また Julia の家では通販サイト Amazon を、社会倫理的に考えて使っていないと言っていました。やはり日本とアメリカだと、考えている視点が違うんだなと気づきました。Julia と私は K-pop が好きなので、K-pop についてもよく話しました。アメリカでも K-pop 好きは多いようですが、アメリカで人気のグループと日本で人気のグループは結構異なっていました。違う国の人と共通の話題で盛り上がったので、嬉しかったです。

今回の研修は多くの学びを得たと同時に、アメリカの観光や食事もエンジョイし、なにより外国での友達を作れたことが自分の中でとても嬉しい経験でした。この経験を、今後にもしっかりと活かしていきたいと思います。



私の研修テーマは、日本とアメリカの“当たり前”を比べて、文化の違いを知ることでした。ここでは、私が研修で驚いたアメリカの“当たり前”について紹介します。

まずは食についてです。アメリカの食べ物が大きいというのは有名ですが、アメリカの人は全て食べ切ることができるのだと思っていました。しかし、実際は全て食べるのではなく、食べたいところまで食べて、あとは捨ててしまうのが普通でした。例えば、ホストの子とその友達とドリンクを買って飲んでいたら、私が頑張って飲み切ろうとしていたのに対し、ホストの子たちは飲みたいところまで飲んだら道路のゴミ箱に何事もなかったように捨てていました。その様子にかなりショックを受けましたが、全部食べ切るのが当たり前で、それが美德であるという日本の価値観との違いを垣間見ることができました。また、アメリカの高校生のランチといえばカフェテリアというイメージがありましたが、実際はホストの子も含め、お弁当を持ってくる人の方が多かったように感じました。

次に学校生活についてです。私が参加した授業はテスト前だったこともあり自習が多かったです。自習では課題をする人が多いそうですが、教室には簡単なボードゲームや、感触が独特な粘土が置いてあり、ホストの子と一緒にそれを使って遊んだりしました。それらは脳の休憩のために置いてあるようで、後で調べたところアメリカの有名企業でも、生産性向上などを目的に採用しているようです。さらにレポートを書く授業でも、途中で教室を出て近くを散歩する休憩時間がある、とても新鮮でした。日本より短期集中で、効率よく授業を進めようという意識があるのだと感じました。また、マウンテンビュー高校では何の授業を受けるかの計画を自分で立てたり、授業のない時間は一緒に中庭でパソコンを使って映画を見たり自由に過ごせたので、イメージとしては高校よりも大学に近い感じでした。日本の高校よりも自由度が高い一方、自分のことを自分で決める責任もその分大きいんだなと思いました。

また、研修中には大統領へのデモ活動に遭遇しました。ニュースでしか見たことのないデモに私は驚きましたが、その場にいたマウンテンビュー生は普通にしていって、デモを通した政治への主張はよくあることだということを強く感じました。ホストファミリーの家にも政治に関する看板やポスターがあり、ホストの子に聞くと、自分たちで作ったものだと言っていました。自分たちの生活のために、声を上げることが当たり前であるという姿が格好良く映りました。

さらにこの研修では、英語を使って意思疎通ができる楽しさを強く感じました。英語の勉強は元々好きですが、自分の生活の中で英語を使うのは、授業の会話や英語の面接とは感覚が違って最初は戸惑いました。しかし、映画の感想や意見を交わしたり、他愛ない会話が続くようになると、生まれた国も年齢も違う人と意思疎通できる不思議さと、そんな人たちとも英語を介せば繋がれる喜びが湧いてきました。おかげでホストの子とは本当に楽しい時間を過ごすことができ、また必ず会おうと約束しました。一緒に過ごせた時間は私の大切な宝物です。この研修に参加できて本当に良かったです。



今回のアメリカでの研修では、特にホームステイやカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)のキャンパスツアーを通して、たくさんの発見があった。ホームステイでは普段できないような貴重な経験をすることができた。中でもホストシスターとの会話が特に印象に残っている。日常的に話す中で、アメリカの生活や学校のこと、日本との違いなどを知ることができ、とても新鮮に感じた。

ホームステイ初日、ホストシスターが自分で車を運転して学校に通っていることに驚いた。日本ではあまり見られない光景だが、MV高校では学校の敷地内に生徒用の駐車場があるほど、この通学スタイルが一般的である。これは、MV高校のあるカリフォルニア州では16歳から運転免許を取得できることが関係しているのではないかと感じた。アメリカでは50の州がそれぞれ独自の憲法・議会・裁判所を持っているため、基本的に州によって法律が異なり、年齢制限なども異なることをホストシスターから教わった。運転免許は16歳から取得できる州があるなど、日本よりも早い一方で、飲酒年齢はアメリカ全土で21歳以上と定められており、日本よりも遅い。ホストシスターによるとペンシルベニア州などの一部の州では、公園や道路などの公の場での飲酒が禁止されている。これらのことから、すべての制度が日本より早いわけではないことや飲酒の規則が厳しいことが分かった。

次に、MVでの授業スタイルについて紹介しようと思う。現地では午前と午後それぞれに3クラスずつ授業があり、1クラスは1時間30分で構成されていた。これは磐田南高校の55分授業と比べるとかなり長く、その分集中力が求められる授業だと感じた。また、授業は自分で自由に選択する仕組みになっており、この点は日本の大学の授業の取り方に近いと感じた。そのため、生徒一人ひとりが異なる時間割で行動しており、日本のようなホームルームの時間はなかった。同じクラスでずっと行動するというよりも、それぞれが自分の選んだ授業に合わせて動いている印象だった。さらに、空き時間には学校の外に出ることも可能であった。その時間を使って、ホストシスターと一緒にレストランへご飯を食べに行くこともあり、授業以外の時間の過ごし方も日本とは大きく違うと感じた。授業だけでなく、こうした自由な時間の使い方も含めて、自己管理が大切な環境だと感じた。

最後に、UCLAの学生から聞いたアメリカの大学受験について紹介しようと思う。アメリカの大学入試は、日本のように一度の試験で合否が決まるのではなく、書類審査が中心となっている点が大きな特徴である。そのため、高校3年間の成績や日々の取り組みが重視され、短期間の結果ではなく、これまでの積み重ねそのものが評価につながる仕組みになっていると感じた。また、大学は成績だけでなく、エッセイや課外活動なども含めて総合的に判断する「総合的評価

(Holistic Review)」を行っていることを知った。特にエッセイでは、自分の経験や考えをどれだけ具体的に表現できるかが重要であり、単に英語力だけではなく、自分自身をどのように伝えるかという力が求められていると感じた。さらに、ボランティア活動やクラブ活動などの課外活動も重視されており、勉強面だけでなく、学校外でどのような経験を積んできたかも評価の対象になるという点が印象的だった。このように、アメリカの大学受験は学力試験だけに頼るものではなく、多方面からその人自身を評価する仕組みになっており、日本の入試制度とは大きく異なることを実感した。

この研修を通して、国籍の枠を越えてさまざまな人と関わり、慣れない環境に適応する中で、新しいことに挑戦する姿勢やチャレンジ精神を身につけることができました。



私はこの研修で、アメリカの環境への取り組みについて調査をしました。今回は特に、ごみの取り扱い方について詳しく調べました。研修中の街を探索したときに見つけたことやホストファミリーに聞いたことをもとに自分の考えをまとめました。アメリカとの比較ができたことで得られた考えも含めて発表したいと思います。

私がこの研修に参加すると決めた理由の一つに、アメリカの環境対策の現状を知りたいという思いがありました。小学生のころから SDGs に関心があり、高校の錬成の授業でも、環境問題を調べることが多くありました。これまではネットを通じて得られた情報だけを頼りに日本と比較していたものが、実際に現地に訪れたことで、自分の目で確認したり、発見したりすることができました。私が現地に行って分かったことは、ごみ箱の数が日本と比べて多い事です。私の住んでいる磐田市では、歩道にごみ箱が置いてあることは少なく、家や学校などの施設に配置されていることが多いです。そもそも、日本人は各自ごみを持ち帰るという風習があるからかもしれません。一方、アメリカでは、ショッピングモールの通路や普通の歩道にもたくさんのごみ箱が設置されていました。観光地では、頻繁に清掃員がごみ箱の中身を回収する姿も見えました。それは、人口が多いアメリカならではの行動だと思いました。しかし、ごみ箱が多いにもかかわらず、地面にごみが捨てられているという様子も目にしました。

私のホストファミリーの家では、日本と同様にごみの分別が行われていました。だけど、私は一緒に過ごしていて、日本よりも分別が甘い気がしました。磐田南高校の生徒に聞いた時、分別が楽だと言っていた生徒もいました。家には大きなごみ箱があり、家の中のごみがたまったら、大きなごみ箱にごみを移していました。ごみ箱は決められた日に家の前に出しておく、ごみの回収業者が回収に来るということを教えてもらいました。

私は、アメリカの取り組みを知り、国の特色に合わせた取り組みが各国で作られている事を知りました。アメリカの取り組みの良さは、道路に落ちているごみの量を減らせることです。それは、日本で問題になっているポイ捨てへの対策案であると考えました。しかし、それをやるためには設備費や管理費など、これまで以上にお金がかかります。それをなくすためにも、改めて自分のごみの管理が大切なことを実感しました。

今回の研修は、私にとって新しい発見や視点を持つ機会になりました。アメリカの人々の価値観は私たちとは全然違うし、それに適応することはとても大変な事でした。でも、考えを共有したり、同じものを分かち合ったりしたとき、私はとてもうれしさを感じました。この研修では、自分一人の行動力が試されているような、人として成長できた10日間でした。特に英語を話すという観点では、自分の英語力を再認識し、さらに向上させていきたいと改めて感じました。磐田南高校の先生と一緒に研修に参加した友達、Mountain View 高校の先生や生徒、そして、ホストファミリーと私の家族。全員に感謝をするとともに、今回の研修で得たことを今後の学校生活や自分の将来に活かしていきたいと思いました。



私が今回の研修を通して、日本との一番の違いとして感じたのは、人々のコミュニケーションの取り方だ。

まず印象に残ったのは、アメリカの人々が自分の意見や感情をはっきりと表現する点である。マウンテンビュー高校の授業に参加させてもらったとき、生徒がとても積極的に発言していたのが強く印象に残っている。分からないことがあると、大きな声で質問したり、自分の意見をはっきり伝えたりしていて、日本の授業とは全く雰囲気が違っていた。先生の説明の途中でも疑問に思ったことをすぐに口にしていて、授業が一方的に進むのではなく、先生と生徒がやり取りすることで進んでいるように感じた。先生が静かにするように指示を出すと、一度は落ち着くけれど、すぐにまた意見を言い合っていて、勢いのあるやり取りが印象的だった。また、人の好き嫌いをはっきり言っていたり、感情をリアクションにしてははっきり表していたりする様子から、思っていることをそのまま表現して伝える文化なのだと感じた。

さらに、感情表現の豊かさも強く印象に残っている。街ですれ違う人が気軽に話しかけてくれたり、カップルが人前で愛情表現をしていたりと、日本ではあまり見られない光景が多かった。女子トイレで偶然一緒になった美人なお姉さんに「かわいいね」と褒められたときはとても嬉しかった。また、リアクションも大きく、喜びや驚きなど素直に表している様子から、自分の気持ちをしっかり伝えることを大切にしていると感じた。その背景には、多民族国家でさまざまな価値観を持つ人々が共に生活していることが関係しているのだと思う。だからこそ、はっきり伝える必要があるのではないかと考えた。

一方で、私は最初、自分の考えをうまく伝えることができなかった。英語がうまく理解できないこともあり、声が小さくなったり、意見を言えなかったりすることがあった。また、私の名前が「ゆう」で、英語の「you」と似ているため、話しかけられているのか分からず戸惑ってしまう場面もあり、うまく反応できないことも多くあった。しかし、まわりの人たちが自分の気持ちを伝えようと積極的に話している様子を見て、自分も少しずつでも伝えようとするのが大切だと感じるようになった。完璧な英語でなくても、ジェスチャーや短い言葉で伝えようとすることで理解してもらえる場面が多くあり、少しずつ自身がついていった。最初と比べてとても成長できたと感じる。

この経験から、アメリカでは「正しく話すこと」よりも「自分の考えを伝えること」が重視されていると実感した。そしてその考え方は、多様な海外の人々と関わる上でとても大切なものだと思うようになった。

今回の研修から、私は自分のコミュニケーションに対する在り方を学ぶことができた。これからは間違いを恐れずに自分の考えを相手に伝えることを意識していきたい。また、将来キャビンアテンダントとしてさまざまな国の人と関わるためにも、相手の文化を理解しながら、自分の意思を分かりやすく伝えられる力を身につけたいと思う。

今回の研修では、ホストファミリーに迷惑をかけてしまったと感じる場面も多くあったけれど、最後まで温かく接してくれたことがとても嬉しかった。「また来てね」と言ってもらえたことが本当に嬉しく、次に会うときには英語力をさらに伸ばして自分の気持ちをわかりやすく伝えられるようになりたいと強く思う。

研修中にはうまくいかないこともあり、悔しい思いをすることもあったが、その経験が自分の中で大きな刺激となった。その経験を成長につなげていきたい。今回の研修に参加して本当に良かったと感じ、将来についてもより具体的に考えるようになった。大学では留学に挑戦したいと思っている。そして将来は海外で活躍できる人材になりたい。



私はこの10日間で様々な人と出会い、様々な出来事を体験し、日本では感じることでできない、私達日本人が想像する「アメリカ」とはまた少し違ったアメリカの空気を感じてきた。10日間という短い期間だったが、私の人生の視野を広げるためには十分すぎる時間だったように思う。教師を志している私は、アメリカの教育と日本の教育を比較し、それによって生じる生徒の違いを知ることによって今後日本がさらに発展するにはどのような教育をする必要があるのかをこの研修旅行の学びのテーマにした。私が感じた違いは主に2つあった。

まず1つ目は、授業を受けるクラス内の雰囲気の違いだ。日本の教室といえば、黒板があり、机と椅子がセットになってすべて黒板を向いてきれいに並べられているのを想像すると思う。しかしマウンテンビューハイスクールでは、私がホストシスターについて出席したすべてのクラスで、四人一組の机のセットが常に作られていて、いつでもグループワークができるような形になっていた。先生にグループワークを指示されたときだけでなく、なにか気になることがあるときに気軽に友達に質問する生徒もいて、全員が一丸となって授業に取り組みもうとしているのがわかった。また、先生が説明をしているときに疑問を持てば、手を上げることで、質問は何か、と聞いてくれる。それは集中して授業を聞いている証拠であり、自分のわからないことを後回しにすることなく解決し自分の深い学習につなげようという意味を感じることができた。これらのことよりマウンテンビューハイスクールの生徒は日本の生徒より、学習への意欲をあらわにして積極的に取り組んでいると考えた。もちろん、日本の生徒も学習への意欲は高いが、自分一人で頑張るという印象がある。しかしマウンテンビューハイスクールでは、生徒や先生と喋ることを重視しているように感じた。

2つ目は授業やテストそのものだ。マウンテンビューハイスクールではAPクラスと呼ばれる、いわゆる特進クラスのようなものがあり、自分の好きなクラスを自分の好きな数だけ選択することができる。私のホストシスターは3クラス取っていたが、友達は4クラス取っていた。APクラスはとても大変だと話していたが、自分の好きな分野を深めることができる機会があることを羨ましく思う。また、私達が訪れた3月下旬から4月上旬は学年末の時期に当たるため、生徒は多くのテストを受けていた。しかし、5日間ですべてのテストを受ける磐田南高とは異なり、普通の授業と並行してテストが行われていた。そのため、授業の宿題とテスト勉強が重なり、朝早くから図書館に行って勉強する生徒も見かけた。しっかりと授業を把握して計画的に学習を進めないといけないこの方法は生徒が自ら学習に取り組む主体性を育てているように思った。

私はマウンテンビューハイスクールの多くの生徒がハーバード大学やUCLAに進学していることを教えてもらった。しかし生徒は皆血の滲むような努力をひけらかすわけではなく謙虚に学習しているような印象を受けた。積極性や主体性のある謙虚な生徒たちによって明るく自由で快活なマウンテンビューハイスクールは成り立っているのだと気づくことができた。

アメリカという国に行きマウンテンビューハイスクールに通ったことで多くの刺激を受けた。今、学生として必要な力をたくさん学ぶことができたことにくわえて将来、大人として必要な力もたくさん学ぶことができたことはとても貴重な経験であった。今回の研修旅行に関わってくださったすべての方に感謝し、これからの人生を生きていきたい。



普段私たちは日本語でしかコミュニケーションを取らないため、日本とアメリカではどのような差があるのだろうと疑問に思いました。また、アメリカでは英語を使っているため、言語の違いによって言い回しなどが変わるというところや、文法的には正しくないような活きた英語を学びたいということで今回この研修に参加しました。

飛行機は日系だったので特に変わった言い回しで案内することはありませんでした。アメリカに着いてしばらくは特に変わった言い回しに触れることはなかったです。あるとしてもメッセージアプリ上のスラングのようなもののみでした。一つ気づいたのは、主語を省略することが多いことです。学校では主語と動詞が必ず必要と習います。ですが実際には主語はなくても伝わる上に、話す場合は省略する場合があります。伝われば何でもいいということです。

アメリカではよく **How are you?**と聞かれましたし、聞くこともありました。そこで **I'm fine, thank you, and you?**って返す人はいませんでした。大体 **good** もしくは **How are you?**と返されました。見ている感じ **I'm fine** と返してる人はいなかったです。一つ気づいたのは、**I'm fine** と言っている人は **fine** には見えなかったことです。以前日本では **I'm fine** というと元気そうなイメージであるが実際にはまあまあな感じであるという話を聞いたことがありましたが、本当にそのように使っていて驚きました。また、断るときにも使っていました。断るときに **NO** と言っているところをあまり見なかったため、おそらく **NO** と直接言うのはあまり良くないのだと思われます。何かしてもらった時や迷惑をかけたとき、日本では謝ることをします。ですがアメリカでは謝るというより何かをしてくれたことに対して感謝をするということの方が重要であるそうです。日本でも感謝は重要ですが、アメリカは日本以上に感謝を重要視しているように感じました。店員にチップを払うというところでも感謝を行動で示しているように感じられました。

アメリカの方々はとても優しかったです。基本的にアメリカには空気を読むという文化がないため、やりたいことはしっかりと主張しないといけません。ただ、気遣いしているというのは気づくらしく、断る場合には **Are you sure?** (本当に?) と言われることが多かった。また、基本的にやりたいことはすべてやらせていただきました。マウンテンビューにはウェイモという完全自動運転のタクシーが走っており、私のホストファミリーの近所の方におすすめされたため、乗ってみたいと言ったところ、何度か乗せていただきました。日本ではあまりタクシーに乗ることはないため、とても新鮮な感覚でした。値段の方は一般的なサンフランシスコのタクシーより少しだけ高めという感じでしたが、人間が運転しているわけではないためチップを払う必要はありませんでした。また、払う手段もなかったです。そのため、降りる際に一応 **Thank you for your driving** と言って降りていました。ここにも感謝を大切にするという感じが出ていました。

アメリカは異国ということで日本と全く違うというイメージを持ったまま行きました。しかし、実際行ってみると違いはたくさんありますが、生活の様子はほとんど日本と変わらない感じでした。私たちは人間であるため、基本的には同じことをしているということです。

今回の研修を活かしてさらに異文化への理解を深めていきたいと思いました。



私にとってこの11日間は充実し、自分の人生について考える最高の機会となった。この研修は私にとって初めての海外に行く経験であったため研修に行く前や出発の日には緊張していた。

しかしこの研修が終わった今、私は喜びと希望に溢れ価値観を広げることができた研修になったと感じる。私は「日本とアメリカの建築物、町並みの違い」そして「日本とアメリカの生活、文化、コミュニケーションの違い」の2つのテーマに着目してこの研修に取り組んだ。

1 日本とアメリカの建築物、町並みの違い

私は、アメリカは日本よりも自然が建物や町並みに組み込まれていると感じた。マウンテンビュー高校やスタンフォード大学、UCLAなどの教育機関には多くの木々や芝生があり、現地の方の質問をしたところ環境保護を大切にしているそうだ。そして特にUCLAは建物も歴史的なヨーロッパの赤レンガ造りになっていて、古くからの歴史や文化を大切にしていた。私がホームステイをさせていただいた家も、周りの家も庭がとても広くたくさんの木や花があった。街路樹も日本よりも遥かに多く、大きかった。またカリフォルニア州は日本と同様、地震が多い地域であるため横揺れから家を守るために家同士が接している。日本とは異なった建築様式に新たな知恵を学ぶことができた。そしてアメリカでは家の中でも土足で生活する部屋があったり、日本のように玄関という明確な家の中と外という区別がなかったりと普段の生活と外の自然に線引がなかった。生活に自然が組み込まれていた。

2 日本とアメリカの生活、文化、コミュニケーションの違い

私は周りの生徒に比べて英語でのコミュニケーションが上手にできない。外国の人と英語で日常の会話をするという初めての経験にホームステイ初日はとても緊張し、thankyou と yes しか言うことができなかった。しかし日が進むにつれて話したいことや伝えたいことが増え拙い英語でもなんとか伝えようと挑戦し、英語でのコミュニケーションをすることができた。周りの友達やホストファミリーは完璧な文ではなく単語だけでも言いたいことを感じ取ってくれたり、何回も理解しようとしてくれて、大切なのは伝えようとする気持ちだと気づくことができた。それと同時にもっと自分の言葉で多くの違う価値観を持った人とコミュニケーションを取りたいという学習意欲の向上にもつながった。この11日間の研修で日本とアメリカの違いに気づくとともに改めて日本の良さにも気づくことができた。

日本には日本の良さがあり、アメリカにはアメリカの良さがあるようにそれぞれの国良さを互いに尊重することがとても大切であり、グローバル化が進むこの世の中で忘れてはならないことだと思った。そして私は自分が今まで作り上げてきた「普通」を見直す事ができた。日本で生活をしていると日本人が大半を占めていて、その日本人らの価値観が自分の中での普通の基準になっていた。しかし、アメリカにはハーフの人やクォーターの人、様々な国の出身の人がいて、日本とは違う生活から「普通」は自分が今まで生きてきた経験値の平均から出来上がるものであるため、これから沢山の経験や様々な人に触れて自分の「普通」の幅を広げて広い価値観を持つ人になりたいと思った。これ以上にたくさんのことを学び、経験をしたこの11日間で、新たな世界に出会うことができた。

最後に、このような機会を作ってくくださった方々、サポートしてくださった先生方や家族、本当にありがとうございました。



私が今回の交換留学中に調べようと思ったテーマは私たちが習わない現地で使われる生きた英語についてだ。このテーマにした理由は、私の過去の海外生活での経験によるものだ。私は小学生時代タイで暮らしており、その時日本人学校でタイ語を習っていたが、実際現地の人に使おうとしてもその習った言葉がなかなか伝わらないことがあった。生活の中の言葉は書く言葉とはかなり違っている。やはりそのようなことはアメリカでもあるのか、またもしそのような状況になったらどのように自然な英語で意思を伝えればよいかという事を考え、このテーマにした。

私はこの十一日間のアメリカでの生活を通して、たくさんの場面で生きた英語と学校の英語の違いを感じた。例えば、学校では何か自分が申し訳ない事をした際は「I'm sorry」と言う習うが、その後の相手からの返答はあまり習わない。しかし、アメリカではそのあとに「Anytime」と言う時がある。私たちの知識だとこれは「いつでも」と訳してしまうが、現地では「気にしないで」という意味で使われていた。この様に日常会話で当たり前のように出てくる言葉でも私たちの知らないもの、違う意味で使われているものなどがたくさんあると分かった。また、いわゆる「若者言葉」がアメリカにも存在していることが分かった。私が最も驚いた言葉は「fire」だ。これは普通「火」などの意味がある言葉だが、アメリカの若者はこの言葉を「かっこいい」という意味として使うそうだ。いわゆる「クール」という事なのだ。他には、仲がいい友達を呼ぶときは男女関係なく「brother」の略である「bro」を使う。ネットから広まる意味が全くない新しい言葉もたくさん生まれている。このように文化が大きく違うアメリカと日本の間でも、若者言葉やネット用語が同じように生まれて広まっていくという共通点があり、私はとても驚き面白いと思った。さらにアメリカではメールの文章の省略などが度々あった。実際、私がホストファミリーと連絡を取っていた時、「idk」と送られてくるときがあった。これは「I don't know」であり、私はこれが送られてきた時になんだろうと思った。日本でも単語の省略などはしょっちゅう生まれているが、文章を丸ごと省略するという事はあまりないように思う。

これは間違いなくインターネットの登場による社会の高速化のせいだと考える。日本では今、若者が動画を倍速にして視聴することが話題になっているが、私のホストファミリーも動画を倍速で見ていた。また、ホストファミリーが動画を動画投稿サイトに投稿していたので、何か投稿するときに意識することはあるかと聞いてみたところ、「最初の数秒でいかに引き付けるかが大切であり、それができないとすぐ次の動画に行く」とのことだった。これは今の日本の状況と酷似している。すべてがスピード勝負であり、いかに早く自分の意思を文章や動画にして発信するかというところが焦点なのだ。やはりインターネットという共通の物があると違う言語の文化があっても同じような発展の仕方をするのだと分かった。

日本は島国ということもあり、外国に行くというハードルが他国よりも高いように感じる。また、外国は文化の違いが大きいという理由で積極的になれない人もいると思う。私はその様な人たちにこそ海外での生活を体験してほしいと考える。なぜなら現代は外国と日本は思っているよりも共通点が多いからだ。言葉自体は日本語と大きく違うが、それが生まれて進化していく過程は案外似ている。学校で習う英語は無駄にはならないが、それと同じくらい生きた英語を知ること興味深いと思うのだ。



私は、約3年半に渡ってマレーシアで生活していました。私にとって、このMV研修は、未知のアメリカの文化に触れる機会であり、また、多民族国家であるマレーシアとアメリカ、それから多民族国家でない日本を比較できる機会でもありました。今回は、MV研修を通して見つけた、マレーシア、アメリカ、日本の違いや、それぞれの特徴を紹介したいと思います。

「マレーシアは”それぞれが違った特徴を持つ数種類に区別できる人々”で、アメリカは”分類したらきりが無いほどたくさんの種類の人々”で構成された多民族国家である。」私の経験からこのようなことを見つけました。データを見れば当たり前のことなのですが、なぜ私がそのように考えたのか、実体験を用いて説明します。

まず、民族構成です。マレーシアは、主にマレー系、中華系、インド系で構成されていて、アメリカは、主にヨーロッパ系、アフリカ系、ヒスパニック系、アジア系で構成されています。マレーシアの場合、混血が進んでいる部分もありますが、人々は主に似たようなルーツを持っていて、生活スタイルも似ていることが多いです。また、ほとんどの人々は英語かマレー語を話します。対してアメリカでは、同じヨーロッパ系の人でも、ヨーロッパの様々な地域にルーツがあり、人々の母国語もばらばらでした。このような背景があるからか、マレーシアの人々の生活スタイルやパーソナリティーはある程度似通っているけど、アメリカの人々は個人単位で異なっていて、統一感が無いように感じました。例えば、マレーシアでホームステイした時は、多くの人が朝からマレー料理を食べていたり、似た系統のレストランが多かったりしましたが、アメリカでは、多国籍レストランがたくさんあり、生活様式も家庭によって大きく違いました。また、人々のパーソナリティーも様々で、大人しくて、シャイな人から、明るく元気な人、ユニークな感性を持つ人など、私が今まで考えていた”THE アメリカ人”の人口は想像より少なく、アメリカの人々の性格をひっくり返して形容しようとするのは無理なのだなと実感しました。他にも、ロサンゼルス内では道を一本挟むだけでコリアタウンからジャパントウンに変わるなど、移動するだけで無限に多様性が見られるように感じました。マレーシアでは同じ民族の中でも、違う民族同士でも、和気あいあいと生活しているのが魅力でしたが、アメリカでは、個人の個性が確立していて、お互いに干渉しないけれど人々はそれぞれの文化を受け入れている、しっかり区別しているといった違う魅力を感じました。皆さんが知っているように、日本では人々が同じ文化や生活様式を共有しています。

だから日本に住んでいると日本独自のものに気づきにくかったり、そもそも無関心であったり、周りの人と自分が同じであるから自分はアイデンティティーがないと感じたり、でもそれが日本の特徴ではないかと考えました。

このように、多民族国家であるマレーシアとアメリカ、ほぼ単一民族の国家である日本を比較することで、人々が共生するには、様々な道があるのではないかと考えました。これからは、この経験を活かしながら、視点を大きくし、世界の人々が共生できる方法も、考えていきたいです。



アメリカでの 10 日間の研修は、旅行では体験することのできない様々なものに触れることができた、貴重な機会でした。中でも、私の研修のテーマとしていたアメリカと日本の生活の違いについてホームステイ先で学んだことを紹介していきたいと思います。

まず、家についてです。私のホストファミリーはアメリカ軍の方の家族でした。そのため、家が NASA の研究施設の敷地内にあったり、家につくまでに通る道に身分確認をする警備員が立っていたりしました。さらに、家から歩いて行ける距離に、スペースシャトルの模型があったり、アメリカの軍用車の展示があったりしました。宇宙が好きな私にとって、家の近くに NASA の建物がある生活はとても幸せなものでした。テーマとは少し離れますが、アメリカ滞在中にアルテミス II の打ち上げがありました。打ち上げの瞬間は学校で他の生徒や先生方と配信映像を見ることができました。その後、家に帰る途中に連れて行ってもらったのは、NASA の職員の皆さんが集まり、打ち上げを見守っていた会場でした。そこは、多くの人が英語で宇宙について話している、私にとって夢のような空間でした。この貴重な体験は、一生忘れることのないものになりました。

次に、学校生活についてです。アメリカの学校は日本の学校と同様に 8 時 30 分に 1 時間目の授業が開始され、3 時から 4 時頃にすべての授業が終了します。アメリカの学校において、驚いたことが 4 つあります。1 つ目は、日によって授業時間が 55 分のときと 90 分のときがあるということです。日本の学校のほとんどが、50 分か 55 分であるため、90 分集中し続けて授業を受けていることにとても衝撃を受けました。しかし、日本でも大学に行けば 90 分以上の授業が当たり前になるため、とても良い体験をさせていただいたと思っています。2 つ目は、理科の科目である物理、化学、地学、生物をアメリカの高校では、1 年で 1 つの科目しかやらず、その代わりに、その全てを終わらせているということです。日本の学校では、ほとんどの科目を並行して 3 年間かけて学習していきます。そのため 1 つの科目の領域を超えてつながりを理解することができることが特徴です。しかし、1 つの科目を集中的に進めることは、科目内での細かなつながりを理解できると感じ、どちらの方法にも魅力があると考えました。3 つ目は、学校全体が自由な校風であるということです。服装や髪型に加え、授業中の飲食など、日本では考えられないくらい自由度が高かったです。通学方法も、アメリカでは、16 歳から車の免許が取れるため、車で通学することができ、校内にも、先生方の駐車場に加えて生徒の駐車場がありました。4 つ目は、授業をいくつか取るのかは自分で選ぶことができ、授業を入れていないときには、空き時間として自分の好きなことが好きな場所でできるということです。私は、ホストファミリーが空き時間のときには、他のホストファミリーの人たちと一緒にトランプをしました。このような自由さもアメリカでの生活の魅力の 1 つであるように感じました。

次に食事についてです。私は、アメリカに行く前には、アメリカ人はとても量が多いものを毎食、食べているのだと思っていました。しかし、私のホストファミリーは、基本的に朝ごはんを食べず、昼食が少し遅くなったときには、夕飯をみんなで食べることはなく、食べたい人だけ食べていました。食べる量も日本人とあまり違いはなかったように感じました。しかし、BBQ のようなものになると、巨大なピザやチキン、大量のマッシュマロなどこれぞアメリカというようなものばかりでした。

今回の研修は、私にとって初めての海外でした。そのため、英語を話すことや海外で生活することに対する不安がとても多くありました。しかし、一緒に研修に参加した友達や先生方、暖かく迎え入れてくれたホストファミリーの皆さん、私の挑戦を笑顔で送り出してくれた家族の支えがあり、楽しく研修を終えることができました。今回の研修に関わってくださった全ての皆さんに感謝をしながら、今後、海外で活躍できるように、日々の勉強に力を入れていきたいと感じました。



私は今回の研修の目的を「見える世界を広げる」としました。幼い頃から私にとってアメリカは憧れの地でした。父や中学の英語の先生から聞くアメリカは別世界で、その話は私にいつも興奮を与えてくれていました。今回こうして本研修に参加できたことを大変光栄に思います。

私を迎え入れてくれたのは、二歳年下である Anaaya とその家族。実際に会う前までは、私は彼女を自身の妹の姿に重ねていました。しかし、一緒に過ごしていると、私の英語力不足を差し引いても、彼女のほうがずっと大人だと感じました。

私達が滞在した期間は、現地の高校生たちは春休みではなくいつもどおりの生活を送っていました。そのため、現地の高校生の日常に入り込む経験ができました。アメリカ人といえば「Party people」なイメージが自分の中にありました。実際に、放課後に友達とショッピングに行ったり、公園でバレーボールをしたりと社交的で活動的な暮らしをしていました。そんな中、Anaaya は自分のやるべきことを的確に把握しており、その達成のために友人からの誘いをパスしたり、テレビを見ている時間もテスト勉強に取り組んだりするなど自身の時間を有効に使うことを優先していました。食事面では、彼女のポリシーに則ってベジタリアンを実践していました。（それを私に押し付けることはなく、お肉を食べることを勧めてくれました。）一方、私は周りの雰囲気にあわせて自分の意見を変えてしまう傾向があります。また、周りに流されて、自分のやるべきことを後回しにしてしまうことも多々あります。今の私では、Anaaya には到底及ばないと感じました。

日本人は空気を読んで優しい嘘をつき、自分の希望を押し留めてしまうことがあります。私が出会ったマウンテンビューの人たちはそうではありませんでした。彼らは表情豊かで、時には、なんのためらいもなく不服そうな表情を正面から向けてくることもありました。（日本人なら笑顔をつくって耐える場面だったかもしれません、、、）彼らは、意見の衝突に臆することなく自分の感情を相手に伝えます。結果がどうであれ、その意思表示を大切にしています。私はそんなアメリカンマインドに魅力を感じ、それこそが今の自分に足りていないものだと気づきました。



実際に海外にいかないとわからない事があるとはよく言われますが、今回まさにそれを体感できました。たくさんの目新しい体験をすることができ、この研修が自分の人生の大きな節目となったと思います。これからはマウンテンビューの人々のタフでクレバーな精神をお手本に、オープンマインドな姿勢で、日々を充実させていきたいです。そして、多角的視点を持ち、国際的に通用する人間に成長したいです。

なぜ MV は世界の最先端を走るのか？

鈴木 良來

私は将来、さまざまな国を飛び回って世界中の人と関わる仕事をしたいという夢があるため、政治とビジネスの面に注目しこの 10 日間の研修を過ごした。そして、世界のビジネスをリードするシリコンバレーの中心地である MV について自分なりに考えてみた。

まず政治について、日本では家庭であまり話をしないがアメリカでは日常的に話題に上がることが新鮮だった。ホストファミリーとトランプ大統領の演説のニュースを見たとき「嘘つきだ」と批判していた様子から、家庭の中でも政治について率直に意見を言い合う文化があるのだと感じた。さらに磐南生と MV 生でサンフランシスコに行った時には「Trump must go now」や「No king」と書かれたボードを持つデモを目にし、自分の考えを社会に発信する姿が印象に残った。

また、トランプ大統領を風刺するようなグッズも販売されていて、政治的な意見が日常の中で表現されていることにも気づいた。アメリカでは政治は医療や税金など生活に直結する問題で、生活のために家族で話し合うことが必要なのだろう。ガソリンスタンドでは 1 ガロン 6 ドル前後の表示を見たが、これは 1L あたり約 230 円程度で、日本よりも高かった。少し前は 3 ドルほどだったと聞き、生活と政治がとても近い関係にあるのだと実感した。

日本もアメリカも国政選挙の投票率は 6 割前後と大きな差はないが、アメリカでは家庭での会話やデモなど普段から政治に関わる場面が多く、政治への関心度に違いがある。MV では様々な国にルーツを持つ人が働いていて、多様な価値観が共存していることも政治の考え方に影響しているのだろう。

次にビジネスの面では、挑戦することがとても大切にされていると強く感じた。その象徴的な例が自動運転タクシーの Waymo である。ホストファミリーや MV 生の中にはまだ完全には信頼していないという声もあった。それでも Waymo が街を走っていることに驚いた。これは最初から完璧なものを求めるのではなく、新しいものを社会に出し、改善を重ねながら少しずつ信頼されるものへと育てていく考え方があるからだと思った。一方、日本では初めから完成度の高いものが求められ、そうでなければ批判を受けやすい傾向がある。このような違いが挑戦に対する考え方の差につながっている。

また、挑戦する姿勢は家庭の中でも見られた。私のホストは自転車競技やレスリングなど様々なスポーツに取り組んでいて、ホストマザーは「子どもがやりたいことにはどんなことでも挑戦させてあげたい。それを支えるのが親の役目だ」と話していた。さらに大学の学費についても、日本では国公立大学は年間約 60 万円、私立でも医学部を除けば 200 万円程度であるのに対してアメリカでは年間 1000 万円以上かかる場合も多いと聞き、その高さに驚愕した。それにもかかわらず教育を将来への投資として捉えていることに気づいた。挑戦することが日常の中で当たり前を支えられているのだ。

このような挑戦を支える姿勢は、MV 高校の教育にも表れていた。授業のレベルを自分で選べたり、AP クラス(大学レベルの授業)を通して専門性を高めたりすることで、積極性や創造力を育てている。また、生徒が電卓を使えるのも単なる計算能力ではなく、知識を活用して新しいものを生み出すことを重視している表れではないかと考えた。

以上のことから、MV が世界の最先端を走っている理由は家庭や学校、社会が一体となって挑戦できる人を育てているからだと考えられる。そして、日頃から自分の意見を表現する習慣があるからこそそれが挑戦する行動にもつながっている。挑戦できる環境があるから人と企業が育ち、その結果として MV が世界の最先端を走り続けているのだ。



今回のマウンテンビュー研修で様々な人と関わり、学校生活や日常生活を経験する中で、アメリカに対する考え方や文化的な違いについて深く考え、自分の視野を広げることができた。私は実践的な英語力を鍛えること、アメリカの文化を知ることを目的としてこの研修に参加した。私が見たり、経験したりしたことをもとに文化的な特徴を紹介したい。

まず1つ目はアメリカの人々はそれぞれ自分の軸を強く持っている点だ。バスでの移動中、「No king」と書かれた札を持ち、現在の政治に反対するプロテスタントを見た。国の問題に対して確固たる意見を持ち、それを遠慮せず主張する姿から、個人の強さを感じた。また、ホストファミリーの友達の家で大人数でダンジョン&ドラゴンズというテーブルトークゲームをしたときのことが印象に残っている。このゲームは、日本にはあまりない、全員で話し合って物語を進めるものである。全員が自由に意見を持って発言し、認め合いながら楽しそうに物語を進めているところを見たこと、このゲームが人気なことを知ったことで話し合いの文化が根付いていると実感した。こうした経験から一人ひとりが「他の人がどうであれ、「これが自分、これが自分の意見」というような自分の軸を持っていることが伝わってきた。

2つ目は人との関わり方の違いや盛り上がりだ。ホストファミリー同士で集まり、集合写真を撮っていたときに見知らぬ女性が写真を撮ってもいいか訪ねてきたときは驚いた。写真を撮りたい理由は、集まっているときの笑顔が素晴らしいからといていた。そういった些細な理由で人と人が関わり、お互いが明るくなるところはアメリカならではの良さを感じた経験だった。また、日本では初対面で話しかけるととき躊躇することが多いと思う。しかし、アメリカでは初対面でも前から知っているかのようなフレンドリーな接し方がほとんどで、短時間で打ち解ける様子が見られた。さらにスクールアセンブリーでの生徒の盛り上がりはとてつもなく良かったことを鮮明に覚えている。緊張なんて忘れてしまうほどの歓声で、スポーツ観戦をしているかのような盛り上がりもあり、「そこまで盛り上がるのか」ととても驚いた。1つ目で述べたように自分の軸を持っていることに加え、フレンドリーな関わり方は、人との距離を縮め、多様な人々が交流する基盤となっていると考えられる。

3つ目は学校生活の自由度の高さだ。登校手段は徒歩、自転車、バス、16歳で免許があるなら車など多様である。私はその中にない、スケートボードで登校をしていたがそれももちろん OK だった。またマウンテンビュー高校のシステムは、大学のような単位制であり、自分で受ける授業を選択することができる。そのため、自分が興味のある科目や内容を重点的に学ぶことができ、一人ひとりにあった学習環境が整っていた。このように高校という早い段階から自分に合わせて、取捨選択をして必要なことを学べることは、夢を叶える、学問や専門的なことをより深めるという点にもつながり、世界に影響を与えるきっかけになっているのだと思う。

これらの3つのことに加え、人種や価値観の多様性が広く受け入れられていることにも気づいた。様々な違いを持つ人々が認め合いながら、ともに生活している姿はとても印象的だった。このような環境がアメリカの自由な社会を作っているということを感じた。これらことからアメリカでは一人ひとりが軸を持ち、個人を尊重し、多様な考え方を受け入れている文化があることに気づいた。実際に経験して得たアメリカへの考えは、貴重なものであり、今後の人生での判断や行動に大きく活きると思う。今回の10日間の研修では忘れることのできない、かけがえのない経験を得ることができた。 今後は経験を活かして広い視野を持ち、自分の進路や将来につなげていきたい。



1 多文化社会のカリフォルニア

ある夜ご飯を食べ終わった後、明るい音楽が外から聞こえてきた。Soraya とお父さんは「爆音でパーティをしているだけだよ」と言っていたが、お母さんは、「マリアッチバンドに違いない」といって散歩に連れて行ってくれた。するとお母さんの予想通り、マリアッチバンドが演奏をしていた。マリアッチとはメキシコの伝統的な音楽と、それを演奏する華やかな衣装を身にまとった楽団の様式である。私は「こんなバンドがあるんだ」と驚き「リメンバー・ミーの世界のようだ」と感じた。するとその家の人が出てきて、少し話を聞かせてくれた。その日は、その家の女性の 50 歳の誕生日を祝うパーティーだった。「病気や事故で亡くなってしまうこともあるから、50 歳の誕生日はとても大切にしている」と話してくれた。収入は高くなくても、家族を大切にするという考え方に感動した。

マリアッチの音楽はとてにぎやかで凄く元気が出るもので、その場の温かい雰囲気が印象に残った。動画に残したいと思い、動画の許可を取ってから撮影をしようとする、その家の人がバンドが見やすいところまで案内してくれた。それに加えて飲み物や食べ物まで提供してくれようとした。その優しさにも心を打たれ思わず涙が出てしまった。ホストマザーも私の様子を見て抱きしめてくれ、「ここはあなたの家だから、いつでも帰ってきていいよ」と言ってくれた。その言葉は今でも心に残っている。

2 言葉の壁ともどかしさ

Soraya はとても賢く、理解力のある子だったので、私のつたない英語でも言いたいことをくみ取ってくれた。また、分からない言葉があると、簡単な英語に言い換えて説明してくれた。しかし自分の語彙力のなさのせいで Soraya に気を遣わせてしまっていると感じることもあり、もっと英語が話せたら会話がより楽しくなったのではないかなどと落ち込むこともあった。そんな中でも、変わらず優しく接してくれる Soraya の姿をみてこのまま落ち込んでいるだけではいけないと感じた。



上手く話せなくても思いは伝わる。しかし、伝わることと理解しあうことは違うと感じた。言葉が足りないことで、自分の考え方や気持ちの細かい部分までは伝えきれず、もどかしさが残った。一方で、英語力があれば自分の考えをより正確に伝えることができ、会話の幅も広がると感じた。さらに、相手に気を遣わせることも減り、より自然なコミュニケーションがとれるようになると思う。いつか、Soraya と再開する時には自分の思いを心から伝えられるようにしたい。

3 理想と現実のギャップ

今回の研修に参加する前からアメリカの自由さについては少し知っていた。日本で面倒だと感じるがあると、アメリカとの生活と比べて、「日本から出たい」と思うこともあった。しかし今回の滞在を通して、そんなに世界は甘くないと感じた。大変なのはどこでも同じで、皆それぞれ自分のやるべきことをしっかりこなしながら、その上で生活をたのしんでいるのだと気づいた。ホストファミリーも学校や職場での悩み事や不満を抱えていた。一日の中で大変だったことなども話してくれた。それでも忙しい中、私に明るく接し、さまざまな体験をさせてくれてほんとに感謝の気持ちでいっぱい。大変な状況でも、人に明るく優しく接することを忘れずに過ごしていきたい。私は、自己肯定感が低く、余計なことを考えてしまう癖があるが、これからは前向きに過ごしていきたい。

私は、アメリカの日常生活が知りたくてこの研修に参加しました。アメリカの面白いところや、好きなところをたくさん見つけたので紹介します。特に、高校ではたくさんの発見がありました。

まず、トイレです。学校に着いて初めに案内されたトイレは男女共有でした。ドアも壁も分厚い金属製だったのでセキュリティ面での心配はそんなにありませんでしたが、鍵がかかっているかは外からはわからない仕様だったため、ノブを押してみるしかありませんでした。このトイレで、日本との多様性への理解や気風の違いを思い知らされました。また、ハンカチを使っている人を見かけることはほとんどなく、乾燥しているアメリカならではの感覚を感じました。

次に、授業です。授業中も自由な気風を感じました。7分以内なら授業を抜けても良く、この時間を使って、ホストの **Maiya** が別行動をしていた私を迎えに来てくれて、授業に途中参加したことがありました。教室に入るとホワイトボードに” **Welcome Yuwa!!** ”と書いてあり、みんなが笑顔と拍手で迎え入れてくれました。本当にうれしかったです。また、授業中の飲食も自由で、先生がドーナツを配ってくれる時もありました。**Maiya** は瓶詰のピクルスを持ってきて配っていました。私も笛ラムネを配ったら、先生含め全員で吹き始めた時はさすがに笑ってしまいました。また、日本と一番違うと感じたところは、授業中の生徒の発言回数です。発表の機会を与えなくとも、あちこちから質問や意見が飛び交っていました。みんな自分の考えを伝えたくて仕方がないように見えました。すごく素敵で、見習わなくてはならないと思いました。

私のホームステイ先のおうちはお母さんが日本人、お父さんがアメリカ人でした。最初に伝えた通り、アメリカの日常が知りたかった私にとって純粋なアメリカのおうちではないことは少し不安な気持ちでした。しかし、実際は、両親ともにアメリカ人の方を見つけることの方が難しかったです。確かに、MV 高校生には様々な人種の方がいて、日本人の私が入っても全く浮きませんでした。当たり前にいろいろな人がいて、いろいろな考えがあって、それを受け入れられている素敵な環境でした。この環境のおかげで、私自身、日本だと気になってしまう周りの目が気にならなくなりました。外見や、自分の意見への不安感がなくなり自分らしく過ごせました。みんなちがってみんないいを改めて感じられたからだと思います。服装も髪型もメイクも自由。自分の好きなものを好きに楽しめばいいという考えも大好きです。



Maiya とは英語でも日本語でもたくさん会話しました。英語だと、日本語の時ほど **Maiya** の人柄を感じ取れず、急に距離を感じてしまいました。心から通じ合って仲良くなるためには言葉を学ぶことが非常に大切だと痛感しました。

今回の研修では、アメリカの良さと言葉の重要性を学ぶことができました。国が違うこと、言葉が違うことは大きな壁ですが、理解すればそれを乗り越えられると思います。たくさんの気づきをくれたこの研修に参加することができて本当に良かったです。支えてくださった皆さんありがとうございました。

私たちの日々の生活に欠かせない Apple や Microsoft の PC、Google の検索サービスなど、それらの多くがアメリカの地で生まれている。そんなアメリカでも特に IT 産業の発展しているシリコンバレーのマウンテンビュー市で、「なぜアメリカが世界の先駆者となり続けるのか」という疑問を持って研修に参加した。

私は Lundstrom 家にホームステイした。ホストの子の名前は Matthew といい、日本で言う高校 1 年生だった。私は彼と一緒にマウンテンビュー高校で授業を受け、そこで最も衝撃を受けたことは授業スタイルだ。例えば、日本の学校で校則について異議を唱えれば、先生方に対する反抗とも受け取られかねない。しかし、マウンテンビュー高校では校則についての議論を授業として取り扱っていた。アンケート結果をもとに性別や人種などでグループ分けした資料を用いて、まずは様々な視点から自分の意見を紙面上にまとめ、その上で議論をしていた。その授業では自分の意見をまとめる時間を 90 分の授業丸々取っていて、服装に関する校則という限られた論題に対して準備時間が多すぎるのではないかと思えた。ところが、全くそのようなことはなく、周りの仲間と話しながら様々な視点から意見をまとめていた。日本でも話し合いをする授業はあるが、それは答え合わせだったり一緒に意見をまとめたりするものであって議論に発展することはあまりない。それに対してアメリカの授業では、自分の意見をまとめ、深める準備時間を十分にとった上で議論を始めるため、多角的でありながらも根拠のしっかりとした意見がぶつかり合い、新たな発見が多く、より広い視野が得られると感じた。世界を牽引する企業がアメリカで発展した所以はここにあるのではないかと思う。Apple や Google は「根拠を持って発信し、議論を戦わせること」を求めているが、逆に言えばこのような能力によって発展してきたということだろう。このような力が高校生のうちから鍛えられていることは環境による影響がかなり大きいと感じた。

私はマウンテンビュー市にあるスタンフォード大学、ロサンゼルスにある UCLA (University of California, Los Angeles) を見学した。どちらも素晴らしい大学で、日本最高峰の東大をも悠々と上回ると知って驚いた。スタンフォード大学は歴史あるスペイン様式のキャンパスを持ちながらも、その地下にあるレスリング場はとても綺麗で新しく、古さ故の不便さなど微塵も感じられなかった。他にも、プールやテニスコートなど様々なスポーツ施設が整備されていた。また、オリンピック選手を多く輩出している有名校でもあるらしく、まさに文武両道を体現しているかのような大学だった。UCLA はロマネスク・リヴァイヴァル様式の建造物でとても美しいキャンパスだった。案内してくれた学生さんは宇宙工学を学んでいて将来は NASA への就職を目指しているとのことで、アメリカでは最先端の技術を学ぶことができる環境が整っていると感じた。

この研修を通して私は多くの人と話し、伝わらない悔しさを感じることがありながらも、アメリカの持つ力、文化、言語など様々なことを学び、「自分の意見を持ち、それを根拠とともに発信し、議論する力」を育てる教育環境こそが、アメリカが世界の先駆者を生み続ける理由の一つであると実感した。

最後にはりましたが、この研修に参加させてくださった磐南・MVHS の先生方、Lundstrom Family、家族へ本当にありがとうございました。



私はアメリカの世界最先端技術について学ぶことを目的に、マウンテンビュー研修に参加しました。研修先のいたるところで最先端技術について知ることができ、非常に驚きました。そのなかでも特に印象に残っていることを紹介します。

1. Waymo の自動運転タクシー

このタクシーは移動できる範囲に限りがあるものの、サンフランシスコ市内やロサンゼルス市内のいたるところを無人で走っています。センサーが車のいたるところについていたので初めて見たときはその異様な車の様子を驚きました。このタクシーは専用のアプリを使うことで指定の場所まで呼び出すことができ、車に乗って車内前方にあるタッチパネルを操作することで動き始め、目的地まで自動で運転してくれます。Waymo の運転は人の運転と比べてもほとんど劣るところがなく、交通量の多いサンフランシスコ市内でも特に大きなトラブルもなく目的地まで到着することができました。しかし、急ハンドルを切ったり交差点内で車線変更をしたりするなど、まだまだ完璧ではないと感じました。それでも、今まで一度も無人で動く自動車を見たことがなかったので非常に興味深かったです。

2. マウンテンビュー高校の授業

基本的に生徒は自分のコンピュータを使用して授業を受けていました。コンピュータサイエンスの授業では JAVA を用いて生徒がその場でサーバーを構築したり、CAD を用いて設計をしたりするなど、日本の普通高校では学ぶことのできない実践的な内容に取り組んでいました。また、マウンテンビュー高校には一部の生徒が選択することができる、Free Style Academy という授業がありました。こ



の授業は、アニメーション、デザイン、写真、映画、音楽といった分野のクリエイターを目指す生徒が専門的な技術を学ぶことを目的に行われ、本格的な機材を用いて実際に生徒が 1 から作品を制作していました。専用の校舎にはレコーディングスタジオがあったり撮影用グリーンバックのあるスタジオもあったりしました。この Free Style Academy は、生徒が自分の挑戦したいことに没頭し、技術の向上にもつながる非常に魅力的な場所でした。日本では専門学校に通わないと学ぶことのできないような内容ばかりでとても新鮮な雰囲気でした。

この研修を通して、日本ではまだ見ることのできないような最先端技術を実際に見て学ぶことができました。また、アメリカの高校の授業を受けることで日本の高校との違いを実感し、世界で通用する人材になるためには何が必要なのかということについても知ることができました。これからの学校生活ではアメリカの友人に負けないよう一生懸命努力していきたいと思います。

今回、私はマウンテンビュー研修に参加し、現地の生活や文化を直接体験する貴重な機会を得ました。日本とは異なる教育環境や授業の進め方を通して多くの気づきや学びを得ることができました。

研修ではアメリカの高校生の日常生活、学校生活を体験しました。日本とは大きく異なり、自由な雰囲気であることは想像していましたが、実際に体験してみると、それは私の想像をはるかに上回るものでした。

アメリカでは16歳で車の運転免許が取れるので、自分の車を持っている人もおり、登校が車という人が多くいました。休み時間には「ドーナツを買いに行こう!」と車で連れて行ってくれました。そして私が一番驚いたのは授業中に食べ物を食べてもいいということです。買ってきたドーナツを次の授業で他の友達にも分けながら食べました。日本ではありえないことです。授業は自分が受けたいものを受けるという選択制であったため毎時間違うメンバーで授業を受けていました。日本のように、先生が黒板に書いて説明をする授業ではなくパソコンで課題が配られるという形式でした。14時や15時には学校が終わっていたため、マウンテンビュー生の運転でショッピングに出かけたり、ビーチに行ったり、プールパーティーをしたりと、とても充実した放課後を過ごしました。22時まで外出しているという日も何日かありました。

このように、とても自由に過ごしていて、あまり勉強に力を入れていないのかと思うこともありましたが、マウンテンビュー高校からはスタンフォード大学に進学する人が毎年10人程度いるということでした。アメリカでは自由な環境の中で自ら学ぶために行動することが求められているのだと思います。マウンテンビュー高校には「フリースタイルアカデミー」というものがありました。アニメーション、レコードなど様々な分野があり、自分の好きなことを追及していくというものです。このような環境があることで、生徒は自分の興味や関心に基づいて主体的に学ぶことができるのだと感じました。UCLAの学生と交流したときには、UCLAやスタンフォード大学といった難関大学に入学するには、成績が良いだけでなくボランティア活動などで実績を残していることが必要とされるということを聞きました。アメリカでは学力だけでなく、経験や主体的な取り組みが重要であるということを感じました。

今回のマウンテンビュー研修を通して、日本とアメリカの教育の違いを実際に体験して、自分から積極的に学んでいきたいと感じました。この研修で学んだことをこれから生かしていきたいです。



多くの人が持っているであろう共通のイメージに、「アメリカ人は空気を読まない」というものがあると思います。日本のように察する文化とは異なり、はっきりと意思を伝えるアメリカでの生活に、私は不安を感じていました。いわゆるローコンテキスト文化に対して、当時の私はどこか冷たいものだというマイナスの印象を抱いていたのです。しかし、ホストファミリーと過ごす中で、その「察しない」文化に救われた出来事があります。

ホームステイ 2 日目の夜、BBQ に参加しました。ホストファミリーの友人も集まり、会話はすべて英語。容赦なく飛び交う速い英語にまったくついていけず、私はその場にいながら孤独を感じていました。笑顔を保とうと必死でしたが、心は限界で、一度部屋に戻り、ドアを閉めた瞬間に涙があふれました。「I can do it」と自分に言い聞かせながらも、涙と震えは止まりませんでした。それでも何か行動しようと、日本から持ってきたお菓子を手に、再び輪の中へ戻りました。一人ひとりに配っていく中で、ある人に断られました。そのときの私は、その小さな出来事さえ受け止める余裕がなく、再び室内に戻り、隠れるようにして泣きました。日本であれば、たとえ不要でも相手の好意を汲んで受け取る人が多いでしょう。しかし今振り返ると、「要らないものは要らない」とははっきり伝えることは、ごく自然なことです。それでも当時の私にとって、その率直な態度は大きな衝撃でした。

そんな私のもとに、ホストファミリーがすぐに来てくれました。そして私を抱きしめ、「家族が恋しいの？」と優しく声をかけてくれました。本当の気持ちをうまく言葉にする余裕もなく、私はただ頷くことしかできませんでした。ホストマザーも来てくれて、そっと寄り添いながら、温かい言葉をかけ、隣で一緒に涙を流してくれました。

日本であれば、相手を気遣い「一人にしてあげるという選択をすることも多いと思います。しかし彼らは違いました。涙が止まらない私のそばに座り、決して一人にせず、同じ時間を共有してくれました。その姿から、表現の仕方は違っても、相手を思いやる気持ちは同じなのだと強く感じました。その後、ホストマザーは私をデザートに誘い、自分たちがドイツ出身であることや、同じように英語を学んできたこと、今でも間違えることがあるということ話をしてくれました。そして、「完璧に話す必要なんてない。聞いているだけでもいい」と伝えてくれました。その言葉を聞いたとき、私は再び涙を流しました。しかしそれは、不安や悔しさではなく、安心と嬉しさからの涙でした。

翌日、ホストファミリーが所属している部活動に招待してくれました。そこには、前日の BBQ に参加していた人もいました。私は気まずさを感じていましたが、その子を含めたメンバーは、初めてのスポーツに苦戦する私に丁寧に教え、たくさん褒めてくれました。

もし自分だったら、「気まずい思いをさせてしまうのではないか」「また孤独にさせてしまうのではないか」と考えて部活動に参加させるのを躊躇すると思います。しかし彼らは違いました。あえて同じ人たちと関わる機会を作り、逃げるのではなく、乗り越えられるように支えてくれたのです。後日、同じメンバーと一緒に昼食をとる機会もあり、私は少しずつその環境に慣れていきました。

これからアメリカへ行く人へ。アメリカでの生活は、楽しいことばかりではありません。辛いことも必ずあります。どんな経験をしたとしても、それだけでその国や文化を嫌いにならないでほしいと思います。日本とは文化の形が違っても、人を思いやる気持ちに変わりはありません。私の経験したローコンテキスト文化は、決して冷たいものではなく、言葉で真っ直ぐに寄り添い、家族のように支えてくれる「もう一つの優しさ」でした。



私は今回のホームステイをとても楽しみにしていました。一年前に自分の家に来てくれた留学生と再会できることが、何よりも嬉しかったからです。空港に着いたときから「早く会いたい」という気持ちでいっぱい、実際に姿を見つけた瞬間、待ちに待った再会だと強く感じました。

一年前といい意味で変わらないその姿を見て、ここから自分の留学が始まるのだと実感しました。また、ホストファミリーが何ヶ月も前から準備をしてくれていたことも知り、迎えてもらっていることの嬉しさを改めて感じ、その温かさに触れました。自己紹介をしたとき、その留学生が一番大きく反応してくれたことも印象に残っており、その瞬間、自然と心が開いていくのを感じました。



再会してからの7日間は、想像以上に楽しく、あっという間に過ぎていきました。学校の休み時間や昼休みには、すぐに外へ出てドライブに連れて行ってくれたり、スムージーやアイスを食べたり、公園に行ったりしたことがとても嬉しかったです。

放課後には留学生の友達と海やプールで遊んだことも、とても楽しく、現地での生活をより身近に感じることができました。特に、家にある温水プールで過ごした時間が印象に残っています。

また、夜は遅くまで二人で過ごし、寝転びながら去年の思い出を振り返ったり、日本とアメリカの食べ物や言語について話したりした時間も忘れられません。

言葉がうまく出てこないこともありましたが、それでも一緒に笑い合い、同じ時間を楽しめていると感じる瞬間が何度もありました。おいしいものを食べたときに自然と笑顔になったり、会話や動画を見て一緒に笑ったり、普段の何気ない会話の中でも相手がずっと笑顔でいてくれたことが、とても印象に残っています。

そうした時間の中で、言葉が完璧でなくても、気持ちは十分に伝わるのだと感じました。

今回の経験を通して、私はコミュニケーションにおいて本当に大切なものについて考えました。

メラビアンの法則では、人の印象は言葉だけでなく、表情や声のトーンなどの非言語的な要素によって大きく左右されるとされています。実際に、言葉がすべて通じていなくても、表情や雰囲気、そして一緒に過ごす空気感の中で、お互いの気持ちを感じ取ることができました。

特に印象に残っているのは、去年の留学での自分との時間が、その留学生にとって人生の中でも大きな出来事だったと伝えてくれたことです。

当時の私は今よりもさらに英語が話せず、十分に会話ができていたとは言えませんでした。それでも、その時間が相手の中で大きな意味を持っていたことを知り、言葉の正確さ以上に、一緒に過ごす時間や感情の共有が人の心に残るのだと実感しました。

この7日間を通して、私は「正確に話すこと」だけがコミュニケーションではないと感じました。言葉以上に大切なのは、伝えようとする気持ちと、相手を理解しようとする姿勢だと思います。

今回の経験は、私にとってとても楽しく、そして温かく心に残る大切な思い出となりました。そして、それはきっと同じ時間と空気を共有した留学生にとっても同じであると感じています。

これからも、言葉や目に見える文章にとらわれすぎず、対面で人と関わることで、そして相手と自分の間に生まれる、効率や合理性だけでは表せない時間ややり取りを大切にしていきたいです。

私は当初、食が日本との違いを最も感じる部分だろうと思っていた。もちろん食に関して日本との相違点はあったが、一番違いを感じたのはアメリカの移動方法に関してであった。したがって、ここでは主に移動方法、特に車についての違いについて紹介しようと思う。

まず、私がホームステイをした家は **Bea** 家でホストの子の名前は **Austin** という。彼の年齢は私よりも一つ下の 16 歳であったが、私は彼の運転する車で学校に通学し、車で一時間ほどかかるビーチにも遊びに行った。日本であれば完全に違法である。しかし、アメリカでは 16 歳から免許を取得できるため、これはアメリカでは違和感のないことであった。実際、学校には広々とした駐車場があり、車で通学している生徒も少なくなかった。さらに、学校の駐車場には電気自動車用の充電設備まで備えられており、そこで車が充電されている光景も見受けられた。

次に、アメリカで見られた車種は日本とは全く異なっていた。私がアメリカで過ごした 10 日間のうち、軽自動車は一度も見られなかった。なぜか。私はアメリカの街づくりが根本の要因ではないかと思う。アメリカの街の特徴として、縦に伸びることは少なく、横に広がっていくことが多いということが挙げられる。つまり、都市はビルが建ち並ぶというより、むしろ外に向かって家々が増えていく傾向にあり、日本とは真逆である。土地が広いアメリカらしい特徴であるが、横に広がるということは郊外に住む人が増えるということであり、通勤には長い距離の移動が伴う。そこで、多くの地域で電車がメジャーな選択肢にないアメリカでは、大多数の人が車を利用し、日本でいう高速道路にあたるフリーウェイを通っていく。ここで、軽自動車は普通自動車に比べ、高速の移動に不向きであることから、日本に比べ普及しないのだと思う。また、アメリカの道路は日本に比べ、数倍は広い。生活道路でさえ、高速道路の片側車線並みに広く、これでは、軽自動車の小回りが利くというメリットも選ぶ理由にはなりづらい。この道路の広さも軽自動車の少なさに拍車をかけているのだろう。逆にアメリカの大きい車が日本のニーズに合わず、日本でアメリカの車が見られないのにも納得がいく。

さらに、アメリカの交通規則は日本のものよりも寛容であるように感じられた。例えば、アメリカでは赤信号であっても、安全を確認した場合は右折が許容される。また、サンフランシスコでは路上駐車が当たり前であり、その場合、ほかの車に多少の傷をつけられたとしてもしょうがないと考える人もいるそうだ。そのため、傷をつけられたくない人は自分のガレージを利用するそうだ。日本人とは違うアメリカ人の豪快さが如実に表れていると感じた。

最後に買い物をしていて感じた違いについて紹介したいと思う。それはスーパーで売られているお菓子の包装の仕方である。日本ではキットカットやアルフォートのように個包装のお菓子が多い。しかし対照的に、アメリカではそういったお菓子は少なく、ほとんどすべてのお菓子が一つに大きく包装され、ジップロックがついているものが多かった。こちらのほうが ゴミが少なくて良いと思う反面、日本の駄菓子のように様々な種類のものを食べたいとき、また、そのお菓子を少しだけ買いたいといったときには不便だと気付いた。包装にしても向き不向きがある。一概に一方が良いとは言えない。アメリカでの経験をもって日本の良さに気付くのである。

今回の研修ではアメリカと日本の文化の違いについてはもちろんのこと、改めて日本の国としての性格を認識できた有意義な時間となった。今回の研修に関わっていただいたすべての方に感謝し、締めとさせていただきたい。皆様、本当にありがとうございました。



私はアメリカの人の生活やデザインの日本との違いに興味がありました。それは日本よりいいなと思えるところもあったり、逆に日本のほうが良いと思うものもありました。

1つ目は家族全員で家事を分担していることに驚きました。私のホストファミリーはお父さんが朝食を作ってくれて学校の送迎もしてくれました。ホストの子ケイトは毎日自分と私のランチボックスをととても手際よく作ってくれました。お母さんは洗濯をしてくれたり、買い物に連れて行ってくれました。私の家でもお父さんは時々料理をしてくれて塾にも送迎をしてくれますが、それはお母さんができない時なので家族で役割がきちんと決まっているのはすごいなと思いました。また家で鶏を飼っていて、朝に卵と一緒に収穫してスクランブルエッグにして食べました。そんなこともあまり日本ではやらないのでは？と思いました。



2つ目はトイレです。トイレは私のこのアメリカ研修において1番きつかったことといっても過言ではありません。ホストファミリーのお家のトイレはとっても綺麗で安心して使用できましたが、学校や公共施設のトイレに入るたびに日本が恋しくなっていました。まずトイレに座ったときに思ったこととしては壁が少ないことでした。下は床から30cm以上空いているし壁の高さはやけに低く扉の開閉部分はかなりの隙間で誰かと目が合うのではとドキドキしながらトイレに入っていました。しかも学校には男女共同トイレというところもあってとてもびっくりしました。日本に帰ってからドアの隙間を観察して気が付きました、扉の両側がきれいなカーブになっているのでドアの隙間をたくさん作らずに扉を開け閉めできているのだと。海外のトイレの中で日本のトイレの素晴らしさに感謝することになるとは思ってもいませんでした。

逆にアメリカの方が良いなと思ったところもあります。アメリカへ渡る前にホストの子に水筒を持っていったほうが良いのか、スーパーでペットボトルの水を買ったほうが良いのかを聞いたところ、水は日本円で1000円ぐらいするので水筒を待ってきたほうが良いとのことでした。ホストの家の冷蔵庫には給水機がついていて毎朝冷たい水を水筒に入れて学校に持っていきました。ペットボトルの水が高いからかペットボトルを持っている人をあまり見かけませんでした。日本では自販機で簡単に買ってしまいうけど、環境のためにはなるべくペットボトルのごみは無いほうがよいなと思いました。

またデザイン以外では多くの羨ましいなと思った点がありました。

アメリカの最も好きだった"差"はノリの良さです。「大きなカバンを持っているね」の本当の意味を知ってる？とケイトのお姉さんに英語のからかい文句を教えてもらいました。「大きなカバンを持っている」は太っていると友達や家族に対してからかうときに使うんだよと教えてもらいました。次の日ケイトがお姉さんを見ながら「お姉ちゃん大きなカバン持っていると思わない？」と聞いてきたので、うっかり共感しかけて意味を思い出して大笑いしました。こちらからは「お花を摘みに行く」を教えてあげたら家族全員爆笑して、その後何度も使っていました。ユニバでは操作説明だけでお客さんたちは大盛り上がりだったりとても楽しい国民性だなと思いました。今回の研修では沢山の文化交流をすることができ充実した11日間でした。

そもそも私が磐南に入学した理由はMV研修にもあったりする。実際に行くことができとても光栄である。私は、アメリカでの日常生活がいかに関日本と異なるかを調べるべく渡米した。日本での生活との違いは甚だしく、驚きが絶えなかった。

私のホストファミリーを担ってくれた Sophie とは、学校や勉強の仕方について話すことが多かった。受験の話も少し聞いた。学校では授業ごとに教室が変わり、毎時間教室移動をしなければいけない。移動と言っても四角なインドアを歩くわけではなく大学のキャンパスを歩くような、外を歩くのでリフレッシュもできる。授業が無い時間や授業の間の少し長めの休み時間のときにスポーツができるし、友達と話しながらお菓子を食べることもできる。授業では、後半に自由時間を設けてくれたり、先生がまるでエンターテイナーかのように話していたりして日本の真面目な座学とは全然違う。本当にリラックスした雰囲気、生徒も積極的に発言、質問していたことが印象的だった。

私が個人的に驚いたのが、授業プリントに空いていた穴が3個のことだった。3個が一般的らしい。穴の数なんて勉強内容にはなんら関係しないが、勉強方法よりもっと根本的な部分も違うことを思った。

私の家族は、本当に日本のことが好きで、家族ぐるみで日本語の勉強をしていた。あちこちに付箋が貼ってあって、それぞれに単語が書いてあり、単語帳をひたすらやる日本人高校生との間に違いを感じた。日本の文化についてもたくさん話して、いろいろ知ってもらうことができた。例えば、今有名な JPOP の話。伝統文化の話。本当にたくさんのかを聞かされて、自分の国がどんな国なのかを知っておくこと、教養の大切さを感じた。

一番ギャップに驚いたのは、レストランやカフェで持ち帰り文化が非常に定着していることだった。もともと提供の量がとても多いこともあるかもしれないが、当たり前のように「持ち帰る」という選択をすることができる。量の指定ができない飲食店で持ち帰りを選ばせてくれるのは、少食の人や、料理を残すことに抵抗がある人だけではなく、SDGs の一環としても良いシステムだと思った。日本でも広まったらいいのに、と思う。

最後に、この場を借りてホストファミリーの Sophie と家族、そして支えてくれた先生方と友達、私の日本の家族に感謝申し上げます。



私は日本とアメリカの文化の違いを肌で感じることを目標にこの研修に参加しました。私はこの研修でホストファミリーとたくさん英語で話して意外な文化の違いを発見するぞと意気込んでいました。ところが私のホストファミリーの家庭内での会話はなんとすべてがスペイン語。これでは文化の違いを探るのは困難なのではないかと不安でした。しかし日本との生活との違いはまさに目標に掲げた通り、自分自身の肌で感じる事が出来ました。



まず最初に感じたのはファッションの多様性です。マウンテンビュー高校は服装や髪、アクセサリやメイクなどに関する規定も日本ほど厳しくないので生徒たちは各々自分のしたい服装をします。アメリカでは自分を表現する手段の一つとしてファッションが非常に重要視されているように感じました。協調性が重視される日本の学校では自分の個性を出せるようなファッションが出来ないのでとてもうらやましく思うのと同時に、日本との考え方の違いを感じました。

次にルーツの多様性に気が付きました。マウンテンビュー高校には様々なルーツを持つ人たちがいました。私のホストはメキシコ系アメリカ人で、私の友人のホストは中国系アメリカ人でした。また、ホストの友人は東南アジア出身の方や、アジア系とヨーロッパ系のハーフの方も多くいました。身近にこんなに多様な出自の方々がいるなんて、単一民族国家である日本では考えられないことです。さらに興味深かったのは、生徒たちの交流関係が似たようなルーツを持つ人に偏らずにいろいろな人と友達になっていたことです。人間は他人との共通点によって安心し、似たような人と一緒にいてしまう性質があります。特に日本人にはそのような傾向があるように思いますが、アメリカの人たちはそれぞれの違いを認め、干渉せずむしろ尊重しているように感じました。

食のという側面について驚いたことは私のホストの家では食事が不定期だったことです。朝は食わず、昼と夜はちゃんとしたご飯を食べる日もあればしっかりと食わずにスナックで済ましてしまう日もありました。私のホストの家庭では自炊をせず、基本的に外食をするという食事スタイルであったこともご飯が不定期になることに起因していると考えます。もしかしたらこれは私のホストだけの話かもしれないと思って他の人にも聞いてみると多くの家庭で朝ご飯を食べていましたが、一定数は朝食を食べない家庭もあるようでした。また、外食の頻度についても各家庭によってさまざまで、私のホストと同じように外食ししかない家庭もあれば自炊の割合が高く、ホームベーカリーもしている家庭もありました。日本でも外食が多い家庭はあるとは思いますが、アメリカはその割合が大きいように感じました。

マウンテンビュー高校へ通うことは私にとって非常に良い刺激になったように感じます。総じてアメリカの人々は相対主義的思考を持っており、「自分」を大切にしているすてきだなと思いました。研修中は日本との違いを感じるたびに、「なぜなんだろう」と考えるようになり、物事を深く見る事が出来るようになりました。この経験を他のことにもつなげていきたいです。